

2012年（第4回）メディア・アンビシャス大賞 選考結果と選考経過

■選考経過

2011年1年間を対象にした今回のメディア・アンビシャス大賞に当たっては、昨年11月から推薦候補を受け付けました。その結果、12月25日の第1次選考会の時点では、活字部門は20本、映像部門では17本が候補に上がりました。今回は、活字部門でインターネット内を流れるニュース、映像部門で毎週決まった時間に放送される通常番組も候補に上がったのが、特徴です。ちなみに前回の大賞選考会の最終候補は活字部門40本、映像部門13本でした。

12月25日の第1次選考会では、主に今後の進め方を話し合い、活字部門では会員閲覧のために、候補の主な記事をPDF化してネットにアップすること（1月7日ごろに実現）、その上で、1月20日の最終選考会で投票・選考する（メール投票もカウントする）ことなどを決めました。この時はまた、推薦者が推薦理由などを説明しました。一方、映像部門では通常番組は各自チェックすることを申し合わせ、1月13、14日に集中上映する作品7本（毎月の会合で上映したものと推薦取り下げ作品を除いて）を選定、さらに上映2日目の14日段階で、20日に受賞選定する5本（入選扱い）を投票で絞ることにしました。その映像部門の14日の選考会では、通常番組の障害者情報番組「バリバラ」、著名人のドキュメント「ファミリーストリート」などを対象に、特別賞設定を話し合いましたが、メディア・アンビシャスの「優れた報道（人）」を発見、育てるという趣旨からすると、違和感もあるという意見が過半を占め、今回は選考から見送ることになりました。

20日の最終選考会の映像部門は、14日に絞った5本（入選扱い）のうち希望の強かった2本を再上映後、5本から各賞の該当作品を投票しました。また、活字部門はメール投票も加えた上位5本から、各賞を決めました。

■選考結果と推薦理由

【活字部門】

☆メディア・アンビシャス大賞「原子力 負の遺産」（北海道新聞。連載）

核のごみの問題は3・11以前から、というより原発スタート時から存在していた。3・11後の原発見直しの議論の中で、目の前の利便性・繁栄のためにとんでもないツケを未来に残している事実、この社会が対峙するかと思いきや、見聞きするのは安全対策やら経済的インパクトやらの論点ばかりに思えた。そんな中、幌延を軸に核のごみ問題を浮かび上がらせた連載は待ち望んだテーマであったし、その内容もていねいな取材で珠玉と感じた。

☆メディア賞「原発とメディア」（朝日新聞。連載）

原発の「安全神話」形成に、メディアはどんな役割を果たしたか、果敢に検証。社説、広告、電力業界からの働きかけ、教科書での記述を通じて文科省などにも切り込んでいる。登場人物を可能な限り、実名で登場させ、その責任を明らかにしている。

☆アンビシャス賞「内閣府原子力委員会の『秘密会議』」の一連の報道（毎日新聞）

国の長期的な原子力政策を立案する原子力委員会で事前に近藤委員長らが「事前勉強会」と称して「推進」関係者を集めて打ち合わせをしていたことをスクープした。その後も、同社は“原子カムラ”の病巣の断面を次々と明らかにした。新聞各社やテレビ各社は当初後追いをしたものの、一過性の報道でしかなかった。その分、報道グループの粘り強さがより光った。

☆入選：「除染手当 作業員に渡らず」の一連の報道（朝日新聞）

国が事業予算に計上している作業員向けの「危険手当」を、請負業者が“中抜き”している実態を報告した。ここでも原発労働の間の部分が明らかになった。国の予算は税金のほず、国民の金が一部業者にかすめ取られているといえる。その後、除染作業のずさんな実態の解明もあった。

☆入選：「人減らし社会」（朝日新聞。連載）

解雇、首切りの現場からの報告。派遣、契約社員ばかりか、正社員もあの手この手で“依願退職”に追い込まれていく手口を詳細に追っている。現代労働哀史といえる実態が生々しい。

【映像部門】

☆メディア・アンビシャス大賞：「放射線を浴びたX年後 ビキニ水爆実験、そして・・・」（南海放送＝愛媛）

1954年アメリカが太平洋で行ったビキニ水爆実験。当時、多くの日本の漁船が同じ海で操業していたにもかかわらず、第五福龍丸以外の「被ばく」は、人々の記憶、そして歴史からも消し去られていた。漁船員の悲惨な状況を知ったローカル局のTVマンが8年に及んでコツコツと明らかにしたドキュメント。被爆後何年もたってから現れる放射能の影響とその死は歴史的な事実ながら、福島原発事故の今後を想像させてあまりある警告になった。ビキニ後7カ月で、日本政府は突如、放射能検査を打ち切り、日米両国政府が文書を交わして事件に幕を引いた理由は何か。権力は人々を棄民する。そんなことも十二分に想像させた。

☆メディア賞：「米軍は沖縄で枯葉剤を使用した！？」（テレビ朝日）

沖縄返還40年を記念したドキュメンタリー。受賞作品は枯葉剤に絞って、主に返還前後に焦点を当てた他の作品と一線を画する調査報道となっていた。沖縄での枯葉剤使用について、米国政府は「そのような証拠はない」、日本政府は「米国からの回答ではないと言っている」。しかし、沖縄に駐留した元米軍兵士は米国の関係省庁から病気と沖縄駐留中に浴びた枯葉剤の因果関係を認める公式文書を受け取っている。公式発表の嘘を、証言と取材の積み重ねで明らかにしていく報道は圧巻だった。

☆アンビシャス賞：「国の責任を問うということ～由仁町C型肝炎訴訟の行方～（HTB）」

4年の継続取材で、C型肝炎多発の町の人々と信頼関係を築き、医療被害の実情と住民の苦悩を掘り起こした。救済の道に向けて住民に寄り添い、国を相手に裁判を起こすまでの葛藤や、無策な行政の姿勢を問う渾身の作といえる。

☆入選：「失われた言葉を探して～辺見庸 ある死刑囚との対話」（NHK／ETV特集）

ある死刑囚とは三菱重工爆破事件の死刑囚、大道寺将司（北海道出身）である。大道寺死刑囚が犯した罪、そこに至った背景、そして彼が獄中で詠む俳句に見る言葉のありようを、3・11のあと一時ものを書けなくなったという辺見庸（石巻出身）が見つめる。「70年代くらいまでは、言葉が肉とか骨とか血とかいうものを引きずっていたんじゃないかと思う」との辺見の言葉が印象的。言葉の持つ（持ち得る？持つべき？）何か根源的なものを考えさせる作品だった。

☆入選：「調査報道 原発マネー～“3兆円”は地域をどう変えたのか～」（NHKスペシャル）

原発立地に伴い自治体に入る交付金や寄付金。番組では、この原発マネーの成立の経緯や用途を検証するため、44の原発関連の自治体へのアンケート、情報公開請求、自治体トップや東電、資源エネ庁へのインタビューを行っており、NHKならではの豊富な調査内容だと感心する。青森県のバラ撒きシステムなど、報告内容にも驚かされる。